

『聲明を稱へるについて』

前 田 龍 海

一 聲 明 の 味

私はかつて御忌傳道の時、聲を囁らしての傳道を終へ大殿の中に入ると折しも多數の出仕僧が、金襴の衣を輝やかせつつ、行道して居られる所であつた。何氣なく座つたのであるがほの暗き御堂の中からにじみ出る梵聲は私をはつとさせた。それは

今やつて來た野外傳道の力とは又異つた響を以て、力づよくしかも壓迫感を伴はずに胸の中にしみこんで來た。じいんと尊い霧圍氣の中につつまれ、わけもなく嬉しくめがしらが熱かつた。私の拙い文では云ひ得ぬから、「淨土」に載せられた高村光太郎氏の文を紹介する。「法要の時のお經は死者に對してよりも、生き残つた者等に對してより多くの意味があるように思はれる。お經全體としての音樂は不思議な魅力を以て人の傷心を和げ、死生の執着心から人を脱却せしめ、更に人の生命力と宇宙に充滿する自然力との微妙な融合を悟入せしめ、自他の對立から人を開放して魂の擴大を自覺せしめる絶對境に人を導き入

れる。……いつのまにか自分でも南無阿彌陀佛を口の中で繰返しながら、廣々とした世界に出てしまふ。さうして妙に勇氣が出て來る。生命のある限り專念に生き切つて爽やかに死なうといふ氣が自然に湧きおこる。私の様な無信心者でも此のお經の功德には感謝せずには居られなかつた。」と云つて居られる。

そも／＼ナポレオンが「音樂は凡ての心藝中について情慾を感化する力最も大なるものなり」と云ひ、或時は佛の「マルセイユ」、獨の「ラインの守り」の如く、人心を愛國の熱に燃やして大勝利を得しめ、又シエルクスピアは「人として音樂の心なく又優美の調曲の爲めに感動せられざる者は、其性必ず信義に背き詐計を逞くするに適す」と云ひ、常時は人心の和を作り清く安らかなものとする。小笠原秀實氏は「聖德太子の國家統制」の中で、古代の樂に關する説明を學ぶならばとして禮記を引き、音樂に含まるる三内容（一）人心利導の方法（二）内徳の顯彰（三）内心の悅樂をあげて居られる。以上の如く音樂の性質を考

へて來るとき、そこに宗教と不離のものであるとの感を強くするのである。

そこでプラット博士は三ヶ條即ち（一）宗教儀式に必要（二）自己教養に必要（三）傳道上必要として宗教音樂の必要を説かれて居る。三部經を繰つてこれと照して見たのであるが、非常に面白い。三部經中より、音樂關係の文を二十五句抜き出した勿論妙聲といふも、名詞と音聲の二義あるも、大きな意味での音樂の中に含めて、總てをそのやうに扱つた。さてそれを分けると三つの文意の種類が見られ（一）樂を讃嘆供養に供するもの（二）極樂の莊嚴として説き出さるもの（三）樂出て且それに感動感化されるもの三通りある。（二）に屬するものは七句あり「讚言」、「供養無量覺」、「恭敬供養諸佛世尊」、「供養其佛及諸菩薩聲聞大眾」、「常讚念佛」、「讚嘆四諦」、等で（二）に屬するは十句あり「微妙宮商自然相和」、「苦空無常無我之音」、等等、極樂の清さから自然に流れ出る音なるを示し（三）に屬するは九句あり「其聞音者」、「其有聞者」、「聞是音者」が淨土の中に同化され自ら「得深法忍住不退轉」、「或聞佛聲或聞法聲……」、「塵勞垢習自然不起」、「即悟無生法忍」、「純說甚深第一義諦」、「應時即發無上道心」、「皆悉念佛法念僧」、「皆自然生念佛法念僧之心」と佛自内證の中に救はれ行くを示すものである。

（二）を更に考へると、極樂は結局佛陀の悟りで、我々から見ると信仰内容であり、信仰内容の充實し法悦のある所自然に音樂と表れ、且、自己信心増上の縁たるを知る。かくてこの（一）（二）（三）はプラット博士の（一）條（二）條（三）條を成程と肯定させる。

特に我々として傳道上の力を思ふべきで、大經卷下には「梵聲猶雷震猶八音暢妙響」とて佛の妙音を示し、又梵摩輸經にも佛音に八種ありとて「一に極妙、二に柔軟、三に和適、四に尊惠、五に不女、六に不誤、七に深遠、八に不竭」と述べ、阿含經には五種を擧げ三十二相の一には梵音深妙相が説かれ、八十種好にも音韻善妙具足ありて、佛が清澄な音聲にて教化された事を知る。「聲につきて決定往生の思ひをなせ」の高稱念佛は、いかに速かに弘まつた事か。又和讃の力も大きなものである。「受決鈔」に「無智の人禮讚誦經の意を知らずと雖も之を修すれば内に滅罪生善の徳あり外に念佛勇猛の徳あり」とある。

ここに佛教聲樂が即ち聲明である。大山公淳師は「聲明といふは佛教の儀式に用ひる古典的の音聲樂を云ふ。その種類には梵讚・漢讚・懺法・和讃・偈頌（伽陀）・誦經・念佛・佛名・誦・祭文・講式・論義類・教化表白等雜多の類別あり、何れも音韻の曲折高下抑揚あり、清美の音をもつて慇懃に唱誦し、清

雅の韻にて讃詠し人の耳を感悦せしめ佛の法樂に供するものを云ふ」と云はれてある。但し印度の五明の一なる聲明は文字・音韻・文法に關する廣い學なりしが、支那日本では音韻が獨立的に考へられ、在來の聲明と別に今日の聲明なる純聲樂が出来た事を記憶しておかねばならぬ。

古來聲明は「悉曇聲明愚僧のわざ」と輕んじらる傾向があつたが、これは大なる誤りで具僧を故意に愚僧とせるもので、誠に明敏な理解力と知識と音聲を具するにあらずんば「聲明の味」は發揮されるものでない。明らかな知識と音感で正しく讀譜し正しく發聲するに非れば音聲でもなく犬が唸つて居るのと大差がない。

私も色々と邦樂と洋樂とを對照的に示し、わかり易く聲明の譜が呑みこめるやうな書籍を探したが、或物は訓詁にすぎ、或物は難解であり困つたので、次に洋樂を少しわかつて居ればわかるように、本宗日用の聲明を稱へるに必要な音律の常識をオルガンの鍵盤を眺めつつ洋樂的に説明する事とする。

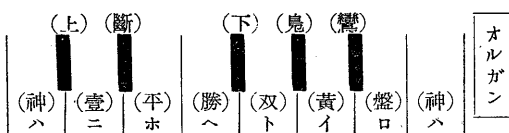
二 音 律

(1) 十二律(構成音名)

いかなる音から成立するのか。洋樂(オルガン)では色々ある音の中より「ハニホヘトイロ」音及び嬰記號(半音高)變記號(半

音低)を使つて合計十二の音をえらんで一オクターブ(ハ音で云へばハ音より上の同名ハ音までの距離)を構成し、これは更に上へも下にも續く。此音は絶對的のもので不動のものである。此の十二の音に相當するものが十二律である。左に支那名和名、洋名を對照して名稱を掲げる。(鍾と鐘は同一)

洋樂名			和 名			支 那 名		
ニ	ニ	ニ	壹	越	(イチコツ)	鍾	(クワウシヨウ)	黃
ニ	ニ	ニ	斷	金	(タンギン)	呂	(ダイリヨ)	大
ホ	ホ	ホ	平	調	(ヒヤウデウ)	蕨	(タイソウ)	太
ヘ	ヘ	ヘ	勝	絶	(シヨウセツ)	鍾	(ケフシヨウ)	夾
ト	ト	ト	下	无	(シモム)	洗	(コセン)	姑
イ	イ	イ	双	調	(ソウデウ)	呂	(チウリヨ)	仲
イ	イ	イ	見	鐘	(フシヨウ)	賓	(スキヒン)	蕤
ロ	ロ	ロ	黄	鐘	(ワウシキ)	鍾	(リンシヨウ)	林
ハ	ハ	ハ	鸞	鏡	(ランゲイ)	則	(イソク)	夷
ハ	ハ	ハ	盤	涉	(パンシキ)	呂	(ナンリヨ)	南
			神	仙	(シンセン)	射	(アエキ)	无
			上	无	(カミム)	鍾	(ワウシヨウ)	應



右の如く名稱を述べ對照したが、少し異なるのであつて、オルガンの十二音は平均律で八度音程を十二等分して出來ており、聲明の十二律は三分損益（順八逆六・洋樂の一度と四度の關係より生ぜしものである。だからオルガンで聲明の節を奏しても似てはおるが正確には出ないわけである。オルガンを利用する場合ここには注意を要する。そこでその差をはつきりする爲左に振動數（音が出るのは物體が速く往復振動するによるが、その一秒間に往復する數、即ち振動數で、これが少いとその音は低く多いと高い。現在人の聞きうるは十六―三萬位で、ピアノで三十―七千位の音を使ふ）の表を示し、基本振動數を一として兩者の振動數の比（音程即ち二つの音の差は振動數の差で定らず比で定る）を對照しよう。

十二律振動數比		洋樂(オルガン)振動數比	
壹	2,027.2	ハ	2,000.0
上	1,898.4	ロ	1,887.7
神	1,802.0	イ ^{**} (ロb)	1,781.8
盤	1,687.5	イト ^{**} (イb)	1,681.7
鸞	1,601.8	ト	1,587.4
黄	1,500.0	ヘ ^{**} (トb)	1,498.3
鳧	1,423.8	ヘ	1,414.2
双	1,351.5	ホ	1,334.8
下	1,265.6	ニ ^{**} (ホb)	1,259.9
勝	1,201.3	ニ	1,189.2
平	1,125.0	ニ ^{**} (ニb)	1,122.4
斷	1,067.8	ハ	1,059.4
壹	1,000.1	ハ	1,000.0

(^{**}は半音上る記號。bは半音下る記號。平均律であるから^{**}はbと等しいのである。)

(2)五 音(音階)

五音とは宮商角徵羽にて五聲とも云ふが、これと十二律との關係が聲明の根本である。宮を三分損益して作りしものである。さてオルガンを奏するには前述の各音を引けばよいのであるが、それには一定の音を一定の法則の下で使用せぬと不快不調和の感を出す。そこで一定の方則にて並べた音が必要となる。この「或る一つの音を基礎とし、一定の法則に従ひ秩序的に順次に整列して上方の同名の音に至る一列の音」を音階と稱する。即ち一オクターブはオルガンでは十二等分され各音間は半音で二つよれば全音であるが、それらの半音全音を適宜に組み合せる事より色々の音階が出来る。長音階でたとへるとハの音を基音とすればハ・ニ・ホ・ヘ・ト・イ・イロの間が全音、ホ・ロハが半音となりその距離にならべられた各音即ち音階にドレミファソラシドといふ名即ち階名をつけて呼ぶのである。この音名を更に階名で呼ぶのはわづらはしくもあり、更に絶對音感修得の邪魔になるので今度の國民學校から、イロハ唱法のみとなつたのである。が、今は五音の説明上用ひたので、この

音階に當るものが聲明の五音音階で、ドレミファの階名が宮商角徴羽及びその變化音なる音名に相當する。

この半音全音の組み方で洋樂では長音階短音階其他の音階が生ずるが、聲明の方でも歴史的理論的に云へば難くなるので簡単に結論的に云ふと、この半音を一つ二つ三つと重なり方の差により呂曲・律曲・中曲の音階が生ずる。宮商角徴羽が中心だから、まとめて云へば五音音階といふ。平たく云へば十二律の上下への配列法を異にする音階の種類が呂・律・中曲となつたわけである。洋樂と對照すれば

中曲	短音階	律曲	長音階	呂曲	和音名	洋音名
宮	6	宮	1	宮	一	ハ
			7	宮變	上	ロ
羽嬰	5	羽			神	イ
羽			6	羽	盤	イ
	4				鸞	ト
徴	3	徴	5	徴	黃	ヘ
				徴變	鳧	ヘ
角	2	角	4		双	ホ
			3	角	下	ニ
商嬰	1				勝	ニ
商	7	商	2	商	平	ハ
					斷	ハ
宮	6	宮	1	宮	一	ハ

○各曲同一位ヨリ發音スル事ナキモ音階ノ都合上カク並ベシモノ。
(多紀氏の圖より)

呂曲・長音階は陽氣、律曲並に短音階は陰氣と一般にさるも曲の性格は第三音が半音上れるか一音上るかによつて陰陽の差を生ずる。

しかるに律曲は一音半も上の第三音なれば呂曲よりも陽氣である。中曲は古來呂律の中間のものだとされてゐる。聲明の特色である。注意すべきは中曲は雅樂の律曲で聲明の律曲は雅樂に用ひない事である。

(3) 調子。

洋樂で長音階ならば基音の「ド」がハ音に位置せばハ調、ニ音ならニ調と呼ばれ各々ハ調は華美とかイ調は莊嚴とかの感じを與へる。

1	エ	(例)	1	半音
7	ハ		7	
6	ハ		6	
5	イ		5	
4	イ		4	
3	ト		3	
2	ト		2	
1	ヘ		1	半音
	ヘ		7	
	ホ		6	
	ニ		5	
	ニ		4	
	ハ		3	
	ハ		2	
	ロ		1	基音
	イ			

(ニ調長音階) (ハ調長音階)

かくの如く聲明にても基音の宮が十二律のいづれかに位置するかにより調子が決定され、三曲と十二律であるから合計三十六の調子が出るも實際は天台に於ては(我宗はこの流れなり)左の調子を用ふ。

呂曲——平調・双調・黃鐘調

律曲——平調・下無調・盤涉調

中曲——一越調・平調・下無調・黃鐘調

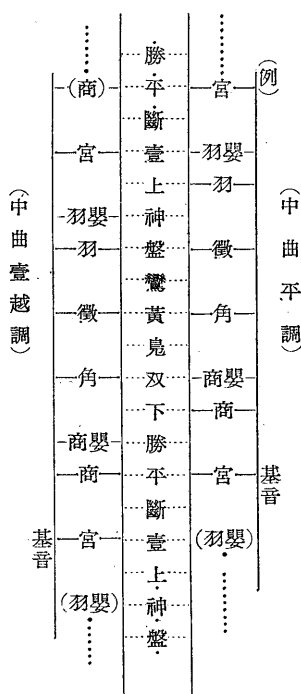
眞言即ち進流では

呂曲——一越調

律曲——平調・盤涉調

中曲——黃鐘調

例を圖に示せば(音階圖参照)



(4) 曲 節。

聲明にはリズムミカルなものとしからざるもの即ち拍子物と無拍子物とがあり序曲(自然的な拍子で型にはまらず)定曲(一定の拍子にはまる)俱曲(序曲と定曲を併用)破曲(序曲・定曲との型を破る)の四種となる。定曲は拍子が主となり洋樂はこれであり序曲は節のみが主となり聲明獨特のものである。

次に拍子について見るに西洋樂では強弱々々と來れば二拍子、強弱々となれば三拍子と明らかであるが聲明の拍子はどうもわかりにくい。序曲の拍子は前述の如く無拍子といふもの一種の緩徐な自由なリズムと思へばよい。定曲の拍子は洋樂と似て凡ての節に對し作用する。基本は二拍子三拍子で且各々半減せる拍子が許されるから四種の打方となる。三拍子組織のを本曲拍子、二拍子組織の拍子を樂拍子と云ふ。更に兩拍子に各四種の打方があり更に各々に本拍子(基礎の一拍子)半拍子(本拍子の半分)延拍子(本拍子に半拍子を加ふ)只拍子(半拍子に本拍子を加ふ)がある。

樂拍子				本曲拍子			
切音拍子		四分全		中音拍子		本曲四分三二重	
只拍子	延拍子	半拍子	本拍子	只拍子	延拍子	半拍子	本拍子
○ + ○	○ ♀	○ ○	○ ○	○ ♀	○ ♀	○ 1	○ 1
○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ 2	○ 2
		○ ♀	○ ♀	○ ○	○ ○	○ 3	○ 3
		○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ 1	○ 4
		○ ○	○ ○			○ 2	○ 5
						○ 3	○ 6
						○ 4	
						○ 5	
						○ 6	○ 3

(5) 甲乙兩様。

聲明の曲節中最も多く使はれる節は「ユリ」でこれは不思議に

宮か徴音に限られ宮をユリとせるを甲様、徴をユリとせるを乙様と云ふ。反對に甲様か乙様かで音が判じられる。

(6) 博士(音譜)。

以上により浮び出たメロディは洋樂なら五線譜で記載せられるが、聲明にては音階よりメロディを強調するため線で上下曲直して示す「博士」と稱する音譜を用ひる。眞言の方が天台で用ひるのより簡單である。之に種々あつて、「只博士」「古博士」(最も昔様のもの)「圖博士」(出音は五音の約束で規定し第二節以下は只博士の樣につく)「譜博士」(圖博士に相似し聲の高低により線を上下す)「目安」(大原に多く使はれ、聲の動くままを線の上下で示す)「假譜」(一種の目安、口に出す事を目に理解せんとしたものでユル所はユル如く大由小由と相違して表す最新式のもの)「五音譜」(進流に覺意以來用ふ)等がある。

現在天台宗ではこの目安に五音博士の意向を加へ新博士を作り、前の目安を古博士と稱し今のを單に「目安」と稱しており、本宗もこの流れに屬する。即ち一字の上中下を起點とし、一々音階の約束をし、それで字毎の出發音位が判るから以後はその音を基とし上に向くか下に向くかで即ち目安式で見て行く。「目安」構成要素を目録と云ひ(一)曲の決定(呂律中何れの曲か)

(二)甲乙兩様の決定 (三)出音の決定(始めの音は何か) (四)

調子の決定(前述の③) (五)音譜の決定(博士を付けるのに上中下各々示す音がちがふ)の五である。これを

今淨土宗法要集⁷³⁹の日没禮讃の所を開いて見るに (一)は本宗では中曲以外のものは特記される事になつてゐるから中曲で (二)は此場合不要である。(三)は「南無」の「南」を見ると右圖の約束と照して見るに「ウ」即ち宮である。(四)の調子は下音である。即ち調子は淨土宗では一越調平調双調を用ひ、各々下音中音上音と名づけておる。だから上中下といつてもよい加減の上下でなく下音の宮は一越の音即ち「ニ」の音、中・上それぞれ平調双調即ち「ホ」「ト」の音が宮音となる。

だから此頁の場合の「南」は「ニ」から始めニ調の音階によつて發聲して行くべきで (五)の約束を心得て「ニ」から出て線が上つたら宮の上即ち商即ち「ホ」の音を出せばよいわけで稽の字がこれである。「禮」の字は水平線なら宮だが下に下つて居るから出音圖の約束により羽の音即ち「ハ」の音を出し、更に上つて居るから宮即ち「ニ」音を出せばよい事になる。

(以上の外尚音律に關して記すべき事あるも難解で長くなるし本宗法式にはあまり必要がないから略するも、更に後記の參考書により研究され度い。)

三 發 聲

古來、眞言にては次の四種の惡聲、三つの聲の病を擧げ排斥して居るから參考に供すると、

○惡聲

一亡國の聲(やたらにしめつぽくセンチなもの)
二人法不知合の聲(人と調子はづれの聲)
三短命病患の病弱々しく滅入りさうなたよりない聲)
四天魔障の聲(喧ましく味憎も腐る聲)

○病

一能音のもの(聲自慢はとかく練習不足で又出しやばりすぎる)
二拍子の善すぎるもの(聲明がマーチ、ワルツになつてはこまる)
三早合點のもの(よくおちついてまちがへぬようにせねばならぬ)

以上色々述べしも、聲明の意義、及び聲明音律の常識概説にして、聲明の理解の一助にもとその大略を記するにすぎない。古來、弘法は「聲字即實相」とまで云ひ、眞言教徒は「三密瑜珈の行業」とし、我々は「讚嘆供養の行」として尊び來つて居る。我々は更に理解を深めねばならぬ。前に擧げし如く傳道上の力甚だ大にして信心増長し法悅境に入る事これに然くものは無く、我淨土教の先覺者達、善導・慈覺・良忍・源信・空也等々、佛教音樂を以てわかり易く力強く傳道し今日淨土教宣流の礎石を固めてゐる。我々、宗教藝術の價值を知り、聲明の妙意に達し大に振起せしめねばならぬ。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。

参考書(音律)

「日本宗教大講座(宗教藝術篇)」「聲明の歴史及び音律。」等
によくまとめてあり、これらではつきり聲明の特色(呂律・
五音・十二律等につき)をつかんで、「日本音楽講話」「日本
音楽の調子の話」「日本上古音楽史」「俗樂旋律考」等と照合
せば、その音律がはつきりする。此一文では全く歴史を説か
なかつたが、聲明に關しての書は多くあるから、研究されたい。
「日本歌舞音楽略史」(岩波文庫)など手輕るによめて面白
い本である。